

# 額田王と忍坂一族 — 『万葉集』 17 —

The relationship between Nukatanookhimi and the Oshisaka clan.

中村学園大学 流通科学部

福 沢 健

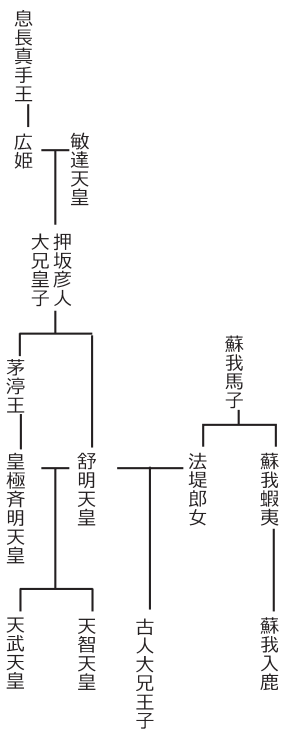
## ●はじめに

前稿まで、『万葉集』巻一は「高市岡本宮に天の下知らしめし天皇の世」(舒明天皇)の歌として、二番歌の《望国》、三〜四番歌の《遊獵》、五〜六番歌の《行幸》の歌が並べられていることを述べてきました。この点については、辰巳正明(注1)が、舒明天皇を始祖的な天皇として位置づけるために、『万葉集』は舒明天皇の時代の歌として天皇儀礼の始原の歌(後世の歌の規範となる歌)を並べたと述べています。『万葉集』巻一は、舒明天皇の歌を今の天皇の時代(舒明天皇と皇極・斉明天皇との間に生まれた天智天皇・天武天皇の子孫となる文武天皇・聖武天皇を中心とする奈良王朝の天皇のグループ)の始まりとして位置づけているのです。

舒明天皇と皇極・斉明天皇(舒明天皇の皇后であった宝王女は、舒明天皇崩御の後、皇極天皇として即位します。その後、乙巳の変によって弟の孝徳天皇に譲位しますが、孝徳天皇の崩御の後、重祚(ちようそ)して斉明天皇となります)は、共に押坂彦人大兄皇子(おっさかのひこひとおおえのみこ)の流れを引く天皇でした。舒明天皇は押坂彦人大兄皇子の王子です。一方の皇極・斉明天皇は、押坂彦人大兄皇子の子である茅渟王(ちぬのおおきみ)の第一王女です。押坂彦人大兄皇子は敏達天皇の皇子で、母は息長真手(おきながまで)王の娘の広姫です。押坂彦人大兄皇子は、

継体天皇を支えたことで力を得た近江の息長系王族と関係が深い皇子でした。奈良王朝の天皇は、息長系王族と深く結びついていたのでした(注2)。

ただし、両親が息長系王族の天智天皇・天武天皇が即位したのは、結果論に過ぎません。なぜなら、舒明天皇の時代には、前代から大きな力を持っていた蘇我氏がいたからです。舒明天皇には宝王女の他に法堤郎媛(ほていのいらつめ)という妃がいました。法堤郎媛は、舒明朝に権力を握っていた蘇我入鹿の叔母にあたる人物です。舒明天皇の皇子は、宝王女の生んだ中大兄皇子(天智天皇)と大海人皇子(天武天皇)、法堤郎媛の生んだ古人大兄皇子(ふるひとのおおえのみこ)がいました。何もなければ、母方の力関係から見て、皇位継承の最有力候補は古人大兄皇子であることは明らかです。しかし、乙巳の変によって情勢は大きく変わ



りました。権力を握っていた蘇我蝦夷・入鹿の父子は殺害され、後ろ盾を失った古人大兄皇子は出家の後に殺害されました。乙巳の変にはいろいろな政治的な意味がありました。その中の一つに中大兄皇子による政権の篡奪という側面があったことは間違いないありません（注3）。

『日本書紀』は、乙巳の変が中大兄皇子の篡奪であったことを隠そうとします。後の天皇たちにとって、自分たちの王朝の始祖が篡奪という不当な手段によって王権を奪取したという事実は都合が悪いものだからです。『万葉集』を歴史書として読むと、『日本書紀』と同じような操作がなされていることが分かります。『万葉集』では皇極・斉明天皇を中心とする後宮（こうきゅう）の女性たちの和歌が多く載せられています。そして、舒明天皇と皇極・斉明天皇との仲が睦まじかったことが強調されます。一方の法皇郎媛の歌は全く載せられていません。今回、扱います「明日香川原宮に天の下知らしめしし天皇の代」（皇極天皇の時代）の歌として巻一に載せられている七番歌も皇極・斉明天皇を中心とする後宮の繁栄を示す歌の一つです。そこで、本稿では七番歌の内容の検討と、作者である額田王の出自の検討を行なうことによって、『万葉集』巻一が舒明天皇の後宮をどのように描いていたかについて検討していきたいと思えます。

### ●秋の野の回想

そこで、まず今回扱う七番歌を見ていきたいと思えます。

#### 額田王の歌

未だ詳らかならず

秋の野のみ草刈り葺き宿れりし宇治の京の仮廬し思ほゆ（1七）  
右、山上憶良大夫の類聚歌林（るいじゆうかりん）を検ふるに曰はく、一書に戊申の年比良の宮に幸すときの大御歌といへり。ただし、紀に曰はく、五年春正月己卯の朔の辛巳、天

皇、紀の温湯より至ります。三月戊寅の朔、天皇吉野の宮に幸して肆宴す。庚辰の日、天皇近江の平の浦に幸すといへり。

七番歌の作歌事情について、題詞（だいし）には「額田王の歌」としか記されていません。この点については巻一の編集者も不審に感じたらしく、「未だ詳らかならず」と記しています。また、参考として左注（さちゅう）に山上憶良の『類従歌林』（『類従歌林』は、『万葉集』巻一・巻二に多く引用されている本で、『万葉集』と異なる作歌事情が多く記されています。『万葉集』の歌がどのような場であつたのかを解明する手がかりとなる本なのですが、残念なことに現存していません。『類従歌林』については多くの研究があります（注4）を挙げて、「一書『類従歌林』に引用されている本。一書とはどのような本であつたのか、詳細は分かりません」には、この歌は「戊申の年」＝孝徳天皇大化四年（六四八）に行われた行幸のときの「大御歌」＝皇極上皇の歌であると記されていると述べています。ただし、正史である『日本書紀』には、大化四年の行幸の記事はありません。そこで、年代がずれるものの、『日本書紀』には斉明五年（六五九）三月に平浦行幸の記事があつたことが記されていると述べています。左注に記されている状況は複雑ですが、伊藤博（注5）は、

額田王が回想する「宇治のみやこの仮廬」の地は、皇極上皇（斉明女帝）が、夫舒明天皇の在世中、ともに近江路にいでました曾遊の地であつた。今、大化四年、宇治のその地に旅宿りするにあたり、夫との思い出深い行幸を偲んで、女帝が側近に対して懐古談を披露した。多感で利発な女性であつた額田王は、斉明女帝の感愛の情をくみとって、その心境をそのまま歌にした。我が意をつくした格調高くすきのない歌にいたく満足し、王のやさしい思いやりとすぐれた歌才をほめそや

した。こうして、額田王は、天皇の「御言持ち歌人」として活躍する契機を与えられることになった。

と述べています。伊藤によれば、七番歌は大化四年の宇治行幸に際して、以前行なわれた（年代不明）行幸に際して宇治に旅宿りをしたことを大化四年の行幸のときに思い出して、その思い出を、額田王が皇極・斉明天皇に成り代わって「秋の野のみ草刈り葺き宿れりし」とうたったものであるということになります。『万葉集』卷一には、この七番歌のように舒明天皇と皇極・斉明天皇との仲が睦まじかったことをうたう歌が続けて載せられています。卷一にこのような歌が多いのは、舒明天皇の正統な妃が宝皇女（皇極・斉明天皇）であることを、『万葉集』卷一が主張していると考えられます。そして、それは、皇極・斉明天皇の皇子である中大兄皇子・大海人皇子が舒明天皇の正統な後継者だという主張へと繋がります。

皇極・斉明天皇に仕えて、舒明天皇への回想を繰り返し行いながら、後宮を歌によってもり立てていったのが、額田王です。では、額田王とはどのような人物だったのでしょうか。

### ● 額田王の出自

額田王についての公式の記録は、『日本書紀』天武天皇二年二月条に、

天皇、初め鏡王の女額田姫王を聚して、十市皇女を生しませり。

あることだけです。ここから分かるのは、額田王が天武天皇の妃であること、鏡王の娘であるということ、十市皇女を生んだと言っただけです。額田王の父親である鏡王についての経歴は、一切分かりません。ただし、「王」と名告っているところから見て、

皇族の出身であることは間違いないでしょう。養老令（天平宝字元年（七五七）に施行された法律）第十三の継嗣令第一条に、

天皇の兄弟、皇子は、みな親王とすること【女帝の子もまた同じ】。それ以外は、いずれも諸王とすること。親王より五世（Ⅱ五世の王 ※ここでは親王を一世として数える）は、王の名を得ているとしても皇親の範囲には含まない。

とあるように、律令制において、天皇の子は「親王」、天皇の孫以降は「王」と呼ばれていたことが分かります。額田王に関しては、「薬師寺縁起」に、天武天皇の配偶者について「天皇、惣べて一后、三妃、三夫人、三采女なり」とあり、三采女として、

初め、鏡王（の女）額田姫王。一女を生む。十市（皇）女。次、胸形君德善の女尼子娘。一男を生む。

今次、穀媛娘。宋人臣大万侶の女。二男・二女を産む。

とあることから、額田王を采女と考える見方もありますが、采女とは宮中の雑役に従事する下級女官で、王族の従事する職掌ではありません。

額田王の出自については、大きく分けると、近江説と大和説の二つがあります。江戸時代後期の国学者である本居宣長（一七三〇～一八〇一）は、『玉勝間』の中で、鏡王とは、この一族が近江国野洲郡鏡里に住んでいたことに由来すると述べています。一方、谷馨（注6）は、王や皇子・皇女の名が、地名やその養育氏族の名に基づくことが多いところから、額田王は、大和国平群郡額田郷の出身だろうと推定しています。

近江説・大和説には共に決め手がないのが現状です。私の立場を述べますと、尾畑喜一郎（注7）が、額田王の姉妹であると考

えられている鏡王女の墓に注目して、近江説を支持していますが、この尾畑説に従いたいと考えています。鏡王女とは、鏡王の女という意味の呼称なので、同じく鏡王の女である額田王と姉妹であると考えることができます。『万葉集』巻四には、

額田王、近江天皇を思ひて作る歌一首

君待つとわが恋ひをればわが屋戸のすだれ動かし秋の風吹く

(4488)

鏡王女の作る歌一首

風をだに恋ふるは羨し風をだに来むとし待たば何か嘆かむ  
(4489)

というように、鏡王女と額田王の贈答が載せられています。この贈答歌は二人の関係が深いことを表しています。『延喜諸陵式』(延喜五年(九〇五)に編纂された法律書。諸陵式とは、朝廷で祭祀するべき陵墓の一覧が記されています)には、鏡王女の墓として「押坂墓」と記されています。押坂墓については、『延喜諸陵式』には細注として「大和国の添上郡の押坂陵域内の東北に在り」と記されています。押坂陵とは舒明天皇の陵墓です。尾畑は、舒明天皇が押坂に葬られたのは、この地が父の押坂彦人大兄皇子と深い関係があったからであると述べた上で、押坂に陵墓を持つ皇族はいずれも押坂彦人大兄皇子と血縁を持つ「押坂一族」と呼ぶべきグループであることを指摘しています。尾畑説によれば、押坂に墓がある鏡王女は押坂彦人大兄皇子の一族であったということになり、ひいては、その父の鏡王、その姉妹の額田王も押坂彦人大兄皇子の一族であると推測することができます。

額田王が活躍したのは、主として皇極・斉明天皇の時代です。先にも述べましたように、皇極・斉明天皇も押坂彦人大兄皇子の一族です。皇極・斉明天皇が額田王を引き上げたのは、本人の才

能はもちろんですが、同じ血縁のグループに属していたからだと考えると分かりやすいでしょう。

### ●まとめ

『万葉集』巻一の語る歴史は、押坂彦人大兄皇子・舒明天皇の正当な后は、同じく押坂彦人大兄皇子の一族であった皇極・斉明天皇であるというものです。そして、父母が押坂彦人大兄皇子の血を引く天智天皇・天武天皇は、舒明天皇の正当な後継者であるというものでした。押坂彦人大兄皇子の子孫であることを強く意識した皇極・斉明天皇に仕えた額田王もまた、同じく押坂彦人大兄皇子の一族に連なります。『万葉集』巻一は、押坂彦人大兄皇子に連なる額田王の歌を集めることによって、舒明天皇以降の天皇はそれ以前の蘇我氏系の天皇と一線を画す新しいグループに属するということを強調したのでした。

### 注

- 1 辰巳正明「舒明朝万葉歌の形成」(『万葉集と中国文学 第二』笠間書院、一九九三)。
- 2 舒明天皇と皇極・斉明天皇と押坂彦人皇子との関係については、「天香具山の国見」『万葉集』121(「中村学園大学流通科学研究」1412、2015)参照。
- 3 乙巳の変の政治的な意味については、「乙巳の変と『万葉集』134」(「中村学園大学流通科学研究」1512、2016)参照。
- 4 市瀬雅之「左注に残された『類従歌林』」(『万葉集編纂論』おうふう、二〇〇七)、大浦誠士「初期万葉の作者異伝をめぐって」(『万葉集の様式と表現』笠間書院、二〇〇八)。
- 5 伊藤博「万葉集積注 一」集英社、一九九五。
- 6 谷馨「額田姫王の生涯と作品」(『額田姫王』紀伊國屋書店

7 尾畑喜一郎「鏡王女と忍坂一族」〔『万葉集の研究』桜楓社、一九八四）。